

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2012 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

「関西性教育研修セミナー2012夏」報告 …………… 1	今月のブックガイド …………… 9
北丸雄二のニューヨークレポート② …………… 7	JASEインフォメーション …………… 10
「ありのままのわたしを生きる」ために② …………… 8	

■ 「関西性教育研修セミナー 2012 夏」 報告

性の教育とアドボカシー

2012年8月6日(月曜日)午後6時より、大阪府立大学中之島サテライト2階講義室において、「関西性教育研修セミナー 2012 夏」が開催された。今回のテーマは「性の教育とアドボカシー(権利擁護)」、その概要を報告する。
主催：関西性教育研修セミナー実行委員会

多彩な講師たちを迎えて

今回のセミナーの講師陣は、2012年8月2日から4日まで、島根県松江市で開催されたアジア・オセアニア性科学学会(AOCS)に海外から参加した研究者5名である。

セミナーは、通訳のPamela Mitchell(ハワイ大学大学院生・医療人類学専攻)の自己紹介から始まった。Mitchellは、日本に滞在し大阪市立都市研究プラザでHIV/AIDSの研究を行っている。続いて第二部の講師の1人でもある同志社大学准教授のPhillip Tromovitchが自己紹介を行い、その後、第一部の連続ミニ講義に入った。

最初は、Milton Diamond(ハワイ大学医学部教授で、これまでの研究と性教育の現状について講義を行った。続いて、香港から来日したSam Winter(香港大学准教授がトランスジェンダーについて、同じテーマ



ミニ講義の様子

でオーストラリアから来日したElizabeth Riley、彼女はトランスジェンダーの家族や子どもに詳しいカウンセラーでもある。

その後、世界性の健康学会(WAS)の学術委員長でもあるAlain Giami(フランス国立衛生医学研究機構教授、臨床心理士でオーストラリア・パースのカーティン大学講師 Matt Tilley、最後に、自らゲイである



Milton Diamond と通訳の Pamela Mitchell



Phillip Tromovitch



Alain Giami

ことを10代にカミングアウトし、マイノリティの権利擁護を中心に「世界性の健康学会ユース部門」副代表として活動している Antón Castellanos Usigli の講義で締めくくられた。

各講師の自己紹介を兼ねた連続ミニ講義の後、「性犯罪と子どもの権利擁護」をテーマにした Phillip Tromovitch と Conneie Diamond (ハワイ州・心理カウンセラー) のグループを加えた6つのセクションにわかれてディスカッションが行われた。

後日、3名の参加者から、参加したグループのディスカッションの感想を寄せていただいた。

Alain Giami を囲んで

神奈川県立汐見台病院産科副科長の早乙女智子さんは、次のように感想を寄せている。



私が参加したのは、世界性の健康学会 (WAS) の 学術委員長であり、フランスの IMSERM (フランス国立医学研究機構) 所属の Alain Giami (アラン・ジアミ) 先生を囲んで集まった10名のグループでした。ジアミ先生は、UNESCOchaire の「セクシュアルヘルスと人権」を Human Earth という活動を通して推進しようとしています。同じグループには、大阪国際大学ジェンダー法学の谷口真由美さんや、淑徳大学大学院生の武子愛さん、NPO 法人 SEAN 事務局長の遠矢家永子さんのほかGIDの当事者の方などがいらっしゃいました。

「性の教育とアドボカシー」というテーマの中で、性的マイノリティに詳しいジアミ先生を囲んで、自己紹介をしながら、それぞれジアミ先生とのディスカ

ッションを堪能しました。個々の質問については個人的なことを含むので割愛します。

DSM (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders)^(注1) のGID診断基準の脱医療化については、DSM-Vでは、Gender Dysphoria(性別嫌悪)であったり、WHOではGender Incongruence(性別違和)というように、「障害」という表現を避けることで、当事者が病気であると認識しないで済むように変化してきています。医療化しすぎることは、当事者を援助する一方で医療が障壁となりうることに繋がります。こうした動きはフランスでも30%の当事者が手術を受けざるを得ないことに対するジレンマとなっているようです。また、当事者の主体性を保つことも支援者にとって重要なことです。視点として大事なものはPanoptical(全視野的な)であるという説明もされました。これは、参加者一同、なかなか理解しがたかったのですが、衆人を監視する監視塔から見るようなイメージで心理的観点から見る、つまり外からでもなく、どこかの片隅からでもない、全体を見渡す視点で性的なマイノリティは語られるべきだという意味に受け取れました。

また、大変興味深かったのは、性別に関して自由記載できるアンケートをフランスで施行したところ、自分の定義に関して400種類の回答があったということでした。男女などという白黒ではなく、性別認識というのは、限りなく自由でグラデーションやバリエーションのあることなのだと思います。マイノリティの労働市場に関する質問は、質問者の置かれた立場が大変厳しいもので、政治的介入の必要性があり、現実問題として即座に解決するには至らないことですが、少なくともジアミ先生が理解して下さり、そ



Elizabeth Riley



Sam Winter



Matt Tilley



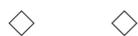
Antón Castellanos Usigli

の場の参加者もその苦悩を共有できたのではないかと思います。

こうした議論の場がもっとあると、様々な立場の相互理解が深まると思います。ジアミ先生も真剣に相談に乗って下さいました。この話し合いに参加して、勇気をもらえたという方もいました。英語と日本語のごちゃ混ぜのディスカッションで、英語力不足から思うように通訳できませんでしたが、初対面の方たちばかりの中で、大変有意義でリラックスした時間を過ごせたことに感謝します。

Matt Tilley のグループ

東京大学大学院総合文化研究科博士課程の正岡美麻さんは、長文の感想を寄せてくれた。



私が参加したのは、Matt Tilley (マット・ティリー) 講師のグループだった。彼はオーストラリアのパーースにある Curtin (カーティン) 大学の講師であり、臨床心理士として個人での開業もしている。最初の自己紹介で Matt 先生は、LGBT やセクシュアリティの流動性、HIV や STI (性感染症)、sexual difficulties (セクシュアルディフィカルティーズ) についてを専門としている旨をお話された。

とくに、性機能の問題に対して、“セクシュアルディフィカルティーズ” という言葉を使う、つまり disorder (疾患・障害) や dysfunction (機能障害・機能不全・不能) よりも difficulty (困難さ) とそれを表現するほうが好きだ、とおっしゃっており、「いわゆる普通」であるかどうか、でなく「自己を受け入れていく」、ということに興味があるという話をし

ていた。ほかにも多彩な講師がおられたなかで、私はこの“disorder/dysfunction でなく、difficulty という表現を好む”という彼の考え方に惹かれて、彼のグループでのディスカッションに加わることにした。

まず、最初に出たのは、私の興味を持った点と同じ“difficulty について”で、質問者はとくに、トランスジェンダーや性同一性障害などについても difficulty という言葉で捉えられるだろうかという点について意見を求めていた。実際、日本では出生時の性別とは異なるジェンダー・アイデンティティ (性自認) を持ち、出生時と異なる性別で生きようとする人を表現するのに、トランスジェンダーよりも性同一性障害という言葉の方が圧倒的に一般に知られており、「障害」として世の中に受け入れられてきたという感覚がある。

この件に関しては通訳を介しながらということもあり、なかなかお互いの主張がきちんと伝わらなかった感もあった。しかし、ディスカッション後も彼の質問に Matt 先生は納得がいくまで一対一で対応を続けてくださり、「たとえば女性の体で生まれたのであれば、ジェンダー・アイデンティティが男性であっても、ヴァギナなどの女性器を用いたセックスをすることも一つのあり方として認められてしかるべき」という意見については一致していた。ただ、日本でそれが当然のこととして認められていくかとなると難しいね、ということ、その質問者と私は話した。

この話の流れで非常に面白かったのは、彼はいわゆる LGBT という括りにされるうちの、トランスジェンダーを除く“レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル”は difficulty とは思わないと述べたことである。それは人間関係に問題が出るか出ないかの話であって、セクシュアリティの特徴は difficulty ではない、



Milton Diamond のグループ (性教育)

という主張をされていた。さらに、彼はこうした人たちを“ノンヘテロセクシュアル”(異性愛ではないセクシュアリティを持つ人)という表現で語っており、その理由として、セクシュアリティは流動性があるものだから、ということ述べていた。

そもそも性機能の問題などに対して difficulty を使うことを推奨するのも、この言葉であれば「人間性そのものを否定しないのではないか」という考えからであり、大学でも学生にはこの点を強調して伝えているそうである。彼の考えの根幹をここに見た気がし、私はとても新鮮な思いがした。一方で、このグループには脳性麻痺の方、車椅子使用者の方も参加していらしたが、一般に障がい者というくくり方を日本ではされてきたであろう彼らは、自身のアイデンティティとして difficulty という言葉を使うことを好むのだろうかという点は、今回直接聞くことができなかったが、非常に興味深いと思った。

次に出た質問は彼の大学に関してである。彼が講師をつとめる Curtin 大学には、南半球で唯一の修士課程での“sexology (性科学)”の名を冠する学部が30年前からあるそうで、学部生(大学生)100人強、修士課程学生40名弱、博士課程学生10名程度が現在在籍しているという。これには参加者の何人もが驚きの声を上げていた。北半球でも通常は sexuality (セクシュアリティ) や sexual health (性の健康) について学ぶ1コースがある程度にとどまっており、もっと広い概念としての sexology を総合的に学ぶ場はそうそうないようだ。それを踏まえると実にユニークな特徴ある大学であると考えられる。

ここでも「日本にはそんな場所はないけれど、どうやってその学部はできたのか。日本にもそうした学



Phillip Tromovitch のグループ (性犯罪と子どもの権利擁護)

部を設立することは可能か」という疑問がとんだ。彼は、そもそも Curtin 大学でも、1人の先生のたった1つの授業から sexology の講義ははじまり、それが好評だったことがきっかけで、最終的に一つの学部として成り立つまでに成長したという話をされた。

厳しい言い方をすれば「需要があり経営が成り立てば大学は何でも動く」そうであり、「どの相手にはどの言葉が通じるか」を考えながら、今使えるものを最大限に使って、受け入れられる言葉を用いて、ぬるぬるとテリトリーを増やし、上がっていくのが権利を獲得するうえで得策であろうとのことであった。私はこれまで、トップが「性科学部をつくるぞ」という働きかけをしなければ学部など作れないと思っていたし、そうなる日本でそれをすることは非常に難しいと考えていたが、こうしたボトムアップの方法が一つの学問領域を立ち上げたという Curtin 大学の実績は非常に希望をもてる例であると感じた。

ただ、周りのメンバーのなかには、日本の保守的さからオーストラリアのようにはいかないのではという点を不安視する人もいた。それでも、これは学部の設立にとどまらず、周囲の人に“性を科学する”という視点を伝える上で非常に参考になるテクニックであると思う。難しい言葉を並べるのではなく、相手が身構えないように、通じる言葉を選んで、使えるものを使って、説明をしていく。そうして少しずつでも周囲の人の理解が進むというのは、一つの大事なステップではなからうか。

この話に関連して、私は南半球唯一の学部であるならば、様々な国から留学生が来るのか、また一方、唯一であるからこそ、この学部で博士号を取得した人たちがみな性科学部に就職できるわけではなく、その後



Alain Giami のグループ

の進路はどうなっているのかという疑問を持ち尋ねてみた。留学生に関してはスウェーデン、シンガポール、ケニア、アメリカ、カナダなど様々な国からの卒業生を排出しているようで、多い時は博士課程では留学生のほうが多数派のこともあったという。ただし、リーマンショック以降、留学生の数も頭うちになっているようであり、現在は母国での通信教育と2回の来豪による実習というプログラムで修士号を取る学生もいるとのことであった。就職に関しては、もちろんみんなが性科学部にいられるわけではないが、性科学の素地を持った心理学者として、セラピストとして、社会学者としてなど、様々な分野で性科学を使って活躍しているとのことであった。

最後に、性教育や HIV の病院内教育について、すでに実践している人たちから、よりよい方法を聞きたいという意見がでた。私はこの分野に関しては専門ではないが、Matt 先生がアドバイスをし、質問者が「それはすでに行っているが、もっとできることはないか」とさらに深い実践法を聞くなど議論は尽きず白熱していた。

先生以外のメンバー同士でも、「こういう人が既に日本でも活動をしているから連絡をとってみては」などと有意義な情報交換がされており、また Matt 先生も自分たちの使っているワークショッププログラムの資料などが豊富にあることをご紹介されていた。これは、英語として存在するたくさんの資源を、いかに日本で広めていくか（日本語に直し伝えていく人の存在がいかに重要か）を実感させられる出来事であった。

会の終わりに Matt 先生は、自分は講師を務めながら臨床現場でも働いていて忙しいこと、でも皆セクシュアリティに関するセラピーをすることを怖がり敬遠



Antón Castellanos Usigli のグループ

するために、今は自分がやらなくては、と思っていることをお話された。今後の臨床心理士のトレーニングは重要であり、特にセクシュアリティに対する見方、価値観を養うこと、そのために「どうしておかしいと思うの?」と聞き返す、そして考えてもらうというステップが重要、なぜならいつその人の価値観が変わるかはわからないから、そう締めくくられた。これは臨床心理士に限った話ではないだろう。私も今後、性科学やセクシュアリティの多様性に懐疑的な人に出会ったら、「どうしておかしいと思うの?」と問うてみたいと思った。日本はオーストラリア以上に保守的かもしれないし、理解の少ない人も多いかもしれない。でも、聞き返してみる。意見を押し付けるのではなく、問うて考えてもらう。そこから、いろいろなことが始まる気がした。

今回のこの企画は、直前に島根県の松江で行われた、第12回アジア・オセアニア性科学会に参加した海外の講師陣を大阪にも呼びお話していただくというものであったが、第13回大会は Matt 先生の故郷、オーストラリアで開かれることが決定している。南半球で唯一性科学学部を持つ大学を有する土壤のあるオーストラリアでの“性を科学する”学会も、私は行って実際にその空気を肌で感じてみたいと思うし、どんな企画が飛び出すのか今からとても楽しみにしている。

トランスジェンダーをテーマに

最後のレポートは、2011年4月から約1年3か月カナダのトロント大学附属中毒および精神保健センターに留学していた佐々木掌子さん（日本学術振興会特別研究員）で、次のような感想を寄せてくれた。



Elizabeth Riley と Sam Winter のグループ



私が参加したセッションは、オーストラリアの Elizabeth Riley 氏と香港の Sam Winter 氏が講師を務めるトランスジェンダーに関するディスカッショングループだった。Riley 氏は、15 年以上この領域の臨床に従事しているシドニーの開業臨床心理士だ。子どものトランスジェンダーをめぐる当事者と家族、そして彼らに対応する教員や医療・福祉関係者に関する心理データをまとめ、まもなくシドニー大学から博士号を受け取るところである。

Winter 氏は、香港大学教育学部の心理学の准教授であり、特に最近ではトランスフォビアの研究を精力的に行っている。また、次に改訂が予定されている ICD-11 (国際疾病分類第 11 版)^(注2) における「性同一性障害」の項目に関する改訂委員のメンバーのひとりでもある。この 2 人を囲って、大学生、現役の小学校教諭、高校の教諭など 10 名ほどが集まった。私も含め、特にトランスの子どもやその親子関係に関心を持つ面々だ。

海外でのトランスジェンダーの親子関係やトランスジェンダーの子どもの学校での様子について具体的なことを聞きたいメンバーに対し、Riley 氏は、カウンセラーとして受け持つケースについていくつか紹介してくれた。そしてそれは家族、そして学校の多種多様な受け入れと拒絶の話であった。家族には受け入れられているが学校ではいじめを受けている子、学校では友人も教師も受け入れているのに家族からは受け入れてもらえない子、家族の中でも祖母は受け入れてくれるが父母からは拒絶をされている子。それは日本の現状と似ているかもしれない。

しかし、さすがシドニーだと思われたのは、受け

入れの良い家族のなかには、保護者のためのセクシュアル・マイノリティ理解ミーティングを組織化した人がいるということだ。親や教員が保護者会で簡単な説明をする程度であれば、日本でもある話だが、そこから数歩も進んで親同士による相互理解ミーティングを立ち上げたのだという。無知や偏見がいじめに寄与していることを考えると、このような取り組みは上手に行えば、性的マイノリティの子どもを守ることにつながるだけでなく、まわりの子どもたちを加害者(いじめっ子)にさせない効果も期待できるだろう。

子どもの性別移行を親が、そして学校が受け入れる際に、「性同一性障害という診断は不必要」と考えるのが、Riley 氏と Winter 氏の共通見解である。実際、Winter 氏は次に改定される ICD-11 で、「小児の性同一性障害」という項目を削除すべきだと改訂委員会で積極的に議論している立場だ。翻って日本の現状はどうだろう。もしも生徒が学校に対し異性として扱って欲しいと訴えてきたら、学校は「まずは病院へ行って診断書をもらってきて」と言うのではないかな。そしてそれが得られるまで動かないのではないだろうか。

梅田駅近辺で行われた懇親会では、話の続きをしようとグループメンバーの数名が Riley 氏や Winter 氏の近くに座った。日本で経験している自らの体験もつと彼らと共有したかった人たちにとっても、よい時間だったようだ。

そのほかのセッションもたいへん熱のこもった実りあるものであった。なお、本性教育研究セミナーは、関西性教育研修セミナー実行委員会の主催、協賛・日本性教育協会、後援・関西エイズ対策協議会で開催された。次回、14 回目の「関西性教育研修セミナー 2012 冬」は、12 月 23 日(日曜日)午後 1 時より関西学院大学大阪梅田キャンパス 1004 号室で、「児童生徒の性暴力被害に対する学校での危機対応～スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの実践から～」をテーマに開催される。

(注1) Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders(「精神障害の診断と統計の手引き」)の略。アメリカ精神医学会によって定められたマニュアルであり、診断基準を例示したものとして広く精神医学界で参照されている。4 度の改訂(DSM-IV)が行われており、近々 DSM-V が発表される予定である。

(注2) WHO では、ICD-10 (疾病及び関連保健問題の国際統計分類: International Statistical Classification of Diseases and Related Health Problems Version 10) を ICD-11 へ改訂する作業を開始している。